

# 退教協だより

第 88 号

発行  
盛岡市大通 1 丁目  
1-16  
岩手教育会館内  
岩手県退職教職員  
協議会  
会長 佐藤 淳一

## 敗戦80年とこれから

前日退教事務局次長 松 淵 昂



岩手の皆さんに感謝

日教組中執の高橋

晴雄さん（和賀支部）

が病気のため、19

92年、急遽、日教

組中執（11年半）になり、退職してから

教育総研2年、日退教では、事務局次長

として16年間勤め、先日（第51回総会）

退任しました。およそ、30年間も日本教

育会館に通うことが出来たのも、岩手の

皆さんのご支援があったからで、心より

感謝申し上げます。

### 「九条の家」誕生

2024年10月、杉並区に洋風二階建ての家「九条の家」がオープンした。全国に「九条の家」は、たくさんあるが、建物があるのは、杉並だけとのことであ

る。

扉には、立憲、社民、共産、れいわ、生活者ネットなどのポスターが貼ってある。ブックカフェも兼ね、電子ピアノ、ステレオなどもあり、歌声喫茶もしている。私も、資本論関係や岸本聡子杉並区長の本を10冊ほど寄付した。敗戦80年を機に、少しでも憲法を生かす運動の拠点になればと思っている。

### 真面目に日本国憲法を読むと

全体としては評価できるが、大きな欠点がある。それは、前文と第1章である。明治以降、福沢諭吉の脱亜入欧をうのみにして、日本はアジア諸国を侵略し筆舌に尽くしがたい残虐な行為をし、植民地にした。それも、大日本帝国憲法（1889年）の天皇の名において、お

### 目次

|                          |         |
|--------------------------|---------|
| ● 巻頭提言                   | 松淵 昂 1  |
| ● 戦後八〇年の節目に<br>行われた選挙に思う | 坂下 正典 2 |
| ● 久慈地区退教協の活動の様子          | 米沢 俊夫 2 |
| ● 私を育てた昭和の生活             | 久慈 喜一 3 |
| ● 参院選取り組みのお礼と<br>今後に向けて  | 佐藤 淳一 4 |

よそ50年余も続いた。

さて、前文では、「…政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し、…」とあるだけである。これだけでは、侵略の事実を隠蔽していると思えない。もっと具体的に記載すべきである。

第1章の天皇についても同様である。戦争責任を無視して元首が象徴になったが、なぜなのか。皇位は世襲とあるが、どうしてか。第7条などは「内閣の助言と承認により」とはあるものの、10項目も国民のため国事を行う、とある。

第2章は、有名な「戦争放棄」である。「武力による威嚇、武力の行使は国際紛争を解決する手段としては、永久に放棄する」「陸海空軍その他の戦力は、保持しない」とあり、軍隊や自衛隊も保持してはならないのである。これから、どのぐらいの軍事費を計上しようとしている

のか。金をどぶに捨てているようなものである。

### 一番危険なのは自衛隊という名の軍隊

かつて軍隊が暴走したことがあった。もし、そういう血気にはやる青年将校などが再び決起したら、どうなるか。すでに、作戦は具体的に検討されているに違いない。今、日本は、自らの国は自らが守る、強大な抑止力を前面に出しているが、かえって危険であろう。

私たちは、国政のみならず、自治体選挙でも、日政連議員を拡大していきましよう！

## 戦後八〇年の節目に行われた選挙に思う

宮古地区会 坂下 正典

昨年、戦後日本の平和への歩みを称賛するかのようにはノーベル平和賞が日本原水爆被害者団体協議会（略称「日本被団協」）に送られた。授賞理由として、「核兵器のない世界を達成するための努力」と、「核兵器が二度と使用されてはならないことを証言を通じて示した」ことを

挙げた。日本被団協は核兵器廃絶を求めて一九五六年に結成されて以来、七〇年近くにわたり国内外で被爆体験を積極的に発信したことが評価された。（ウィキペディアより）

そして今年、戦後八〇年の節目に第二七回参議院通常選挙が行われた。投票率は五八・五一％で前回二〇二二年参議院選挙を六・四三％上回った。（総務省のデータより）

近年、有権者の選挙への意識の低下が指摘され、投票率の低下が問題視されてきただけに喜ばしい結果だった。また、選挙区では横沢さん、比例区では水岡さんがともに当選したことも喜ばしい結果だった。

一方、東京都選挙区では「日本の核武装が最も安上がりで安全強化策の一つ」と主張した候補が六七万票を獲得して二位で当選した。男性からの支持が特に高く、一〇・一六〇代の各世代で男性有権者の最多得票を得たという。（ウィキペディアより）

この候補の主張に賛同する有権者がこんなにいるのかと驚いた。しかも若い世代だけから支持されたものでもない。この人たちは、広島・長崎に投下された原

爆の悲惨な状況、そして今も苦しみ続けている被爆者の方々のことを知っているのだろうか。また、日本被団協の活動を知っているのだろうか。不安が募る。

日本の戦後八〇年の平和は、決して偶然ではない。まして与えられたものでもない。労働組合や被団協、高校生平和大使・高校生一人署名実行委員会などの各種団体の活動と国民の願いを通し、みんなが努力して成し遂げられたものだ。これからもこれまでの歩みを続けることが、平和を守り続けるには必要なことであるという思いを強くした。

## 久慈地区退教協の活動の様子

九戸地区会 米沢 俊夫

私は、九戸地区退教協で事務局長を仰せつかっている米沢と申します。今回の原稿依頼の内容は、戦後八〇年と退教協の活動というテーマでしたが、私自身は戦後生まれであり、特にそのテーマで報告できるような知識は持っておりません。ただ、私が平和環境久慈地区センターで

事務局をしていたころ、同じ教職員組合で社会科サークルの活動の一環で、地域の戦争体験や史跡を調べる活動をしていた佐々木幸男さんを思い出します。思い出しますという訳は、ついこの間、佐々木幸男さんは、現職のまま病気で帰らぬ人になってしまったからです。岩手県の組合員でしたら、お名前と顔を覚えている方の多いことと思います。九戸支部の書記長も歴任し、とっても元気のいい書記長でした。前年の支部の懇親会にも一緒に楽しんだので、今でも彼の死は受け入れられない状況です。謹んでご冥福をお祈りいたします。

佐々木幸男さんは、野田村や久慈地区でも艦砲射撃を受けた歴史があることを調べる活動をしておりましたが、地区センターの平和学習会には、戦争体験のある退教協会員も駆けつけ、その当時の学校の様子も伝えてくださいました。戦後八〇年といえば、そんな昔のことではないし、ロシアとウクライナ戦争が続いている現状を見ると決して人ごとではないことが分かります。一刻も早く戦争が終わることを祈っております。

さて、話は変わりますが、九戸地区では、会長の外館正敏さんが中心になって

会員の皆様が教職員になった頃の学校や生活の様子を会員通信として発行する取り組みを行っています。戦後間もない中で採用された方からつい最近退職された方まで約七〇名の会員通信は、とても評判が良い活動になっています。何も趣味も特技もない私は、外館地区会長と一緒に会員通信を通じて、会員の皆さんのお宅を訪問するのがとても楽しみになっています。

つい先日には参議院選挙が行われましたが、退教協の会員の皆様、退女教会員の皆様には現職組合員以上にご協力をいただきました。この場をお借りして御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。混迷する政治状況ですが、平和で安心した生活ができるよう微力ながら皆様と共に頑張りたいと思います。

## 私を育てた昭和の生活

二戸地区会 久慈 喜一

今年は昭和百年の年にあたるといわれているが七十七歳の私にとって四十年間を昭和の時代に過ごしたことになる。誕生・幼少期・少年期・青年期そして成年

と人間形成が行われる大事な時間が昭和だったのではないかと考えている。戦後ということもあり、昭和四十一年に学校事務職員として勤め始めた職場では平和と民主主義を追求する組合運動に自然と引き込まれたことを思い出す。

四月着任早々、勤務先の体育館で支会の定期大会が行われた。当時支会長だった校長が大会が終わった後の懇親会の途中職員室に戻ってきて「ところであなたは組合に入っているか？」と聞いた。給料計算が仕事の私は互助会や組合費の引き去りを行っており、組合加入の意識もないまま組合費の引き去りを行っていたので、「組合費は納めています。」と言ったところ「じゃあなたも組合員だ。体育館に行ったら飲んできなさい。」と言われた。確かな理念や思想は持っていなかったが、職場の仲間と一緒に活動することは自分が育つための大きな力であり、組合は自分にとって必要な存在だったと思っている。

その年の十月二十一日、岩教組として初めての経済闘争である「人事院勧告完全実施要求」のストライキが行われた。今思えばその年に行われたILOの勧告により管理職の校長は組合から脱退、教

頭は管理職とはなっていないが立場上組合を脱退していたと記憶している。その後、「人事院勧告完全実施要求」の闘争はしばらく続くが十月実施、八月実施と段階的にしか進まず、四月完全実施はかなり後のことになる。安定した生活を求め経済的な要求を運動として進めたこともあり、社会や経済の発展と相まって生活の向上が図られた時代だったと思っている。

しかし、豊かな生活が得られた結果として今問題になっている地球温暖化などの環境破壊につながる現象が起こっているのではないだろうか。この先生生活する人に思いを向け、昭和の素朴な生活を思い起こしながら生活していかねればならないと思っている。

## 参院選取り組みのお礼と今後に向けて

会長 佐藤 淳一

7月の参院選では、岩教組・高教組・退教互が推薦した全国比例「みずおか俊一」と岩手選挙区「横沢たかのり」両候

補の当選をかちとることができました。これは、各地区役員を中心とした取り組みの成果であり、皆さんのご協力に感謝します。参院選に向けて、退教協として「両教組政策制度学習会等への参加」や「会員への推薦候補者の周知、支持拡大のための電話かけ」などに取り組みましたが、今回長年の課題であった「退教互による推薦決定」が実現し、会員に組織的に推薦候補者を周知できるようになったことも大きな力になりました。

課題としては、全国比例候補者の支持拡大をはかる際に、「候補者名の周知」や「個人名で記載すること」などの理解を広める難しさがありました。また、政策制度学習会については「会員に支持を広めるには給特法や多忙化解消など現職の問題だけでなく、物価高対策や社会保障など退職者の視点の内容も必要ではないか」との声も聞こえました。今回あげられた課題については、次回の取り組みに生かしていくことができればと思います。

事実上の「政権選択選挙」となった今回の参院選では政権与党の自公が大幅に議席を減らしましたが、立憲など野党全体として政権を託せる国民からの信頼は

得られておらず、新興の政党が既成政治に対する批判の受け皿となりました。今回議席を大幅に伸ばした参政党は、「教育勅語の尊重」・「国家主権」などを謳った新憲法案や「終末期の延命措置の全額自己負担化」といった物議を醸す政策も掲げており、また外国人差別を助長するような主張は看過できず、今後公党としての責任や資質が問われます。国民の多様な価値観を反映する政党が国政に参入することには意味がありますが、多党化が進み対立や分断が深まるだけであれば、政治への失望が広がりがかねません。野党はまとまって政権交代をせまることのできるのかどうかも含めて、国民のための政策を前進させることが求められます。多党化が進む中政策の一致点をどう見いだしていくのか、戦後政治の大きな転換点を迎えて真の民主主義を追求する政党政治のあり方が試されていると思います。

次期衆院選に向けて政治状況を注視し、岩教組及び退教互とも積極的に意見交流をしながら、我々の願う「平和で民主的な、人権尊重を基本に安心して生活できる政治」の実現をめざして、組織の強化・拡大と学習・行動の積み重ねに取り組んでいきたいと考えます。